

生活と病気

めまいの話(高齢者のめまい)

耳鼻咽喉科 吉浜博太(医師)



加齢により体全体に生理的変化と病的変化が起こります。今回は、脳血管障害を中心として説明しましょう。

①脳血管障害

脳は全身臓器のなかで最も代謝の盛んな臓器で、心拍出量の15% (毎分800~900ml) の血液を送り込まれています。脳血流の低下は致命的となるため、血圧変動により脳血流が過度に減少あるいは増加をしないように、脳血管自動調節能という仕組みがあり、主として自律神経により維持されています。

②一過性虚血発作

椎骨基底動脈領域に一過性の虚血(血流低下)が起こると、めまい、霧視、複視、構音障害(ろれつが回らない)、嚥下障害(のみこみがうまくいかない)、失神、口閉や上肢のしびれを生じます。

③慢性めまい症

回転感を伴わず、体や頭がふらふらする、船酔いに似ためまいが慢性的に続くのに、神経学的検査でも神経学的検査でも著変が認められず、「年のせい、気のせい」と放置されている例が他院の報告にあります。大脳の変化を疑って検討されているようです。

④薬剤性めまい

高齢者は薬の影響を受けやすくなるため、降圧剤、アスピリン、抗不安剤、抗うつ剤などで、めまいを起すことがあります。

⑤めまいを起さない

めまいを起さないためには、肥満、高脂血症、高血糖、高血圧症などの生活習慣病にならないことが第一段階です。タバコをやめることも大切です。

生活習慣病予防が大切

★ “年のせい” “気のせい” にせず受診を

高齢者では血管病変による血流自体の低下だけでなく、血管自動調節能の低下により容易に血圧が下がり、脳循環障害が起こります。バランスの神経中枢がある脳幹や小脳は椎骨基底動脈系で支配されており、高血圧や動脈硬化病変があるときは、この領域に循環障害がおこり、めまいを生じやすくなります。

頸の回転や棚のものを取ろうと上を向いたりしたとき誘発されることが多いです。すぐに血流がよくなれば、これらの症状は治りますが、脳梗塞に移行することもあります。さらに激しい頭痛を伴う場合は、小脳や脳幹の出血が疑われ、すみやかな対応が必要です。

③糖尿病とめまい
高齢者のめまいに



ムスカリー 春花壇の縁取りに植えられる早春を彩る花の一つです。小さなかわいい花が代々木病院本館南東角の、花の落ちた山茶花の下に咲いています。しばらく楽しめます。水仙同様、手間いらず、の草花ですよ。 総務課 今野康夫

季節の草木

認知症 R65



認知症を進行させないためには、人間として意欲的に「脳」を使っている状態が効果をあげます。ということ

今をあとぞぶ

は、楽しく先々を計画し、「今をあとぞぶ」毎日をおくれば良いということになります。高齢期になって「今をあとぞぶ」姿勢については前回までに述べた通りです。 「死」や「老い」の準備は、自分では一回しか経験できず、認知機能も衰えながらです。 「老い」であり、「死」だと言ってしまうと思いません。もちろん私たちが「認知症の予防」に成功していませんから、残念ですが、正確に断定できる証拠はありません。

薬害とは、「副作用」とイコールではなく、危険情報を軽視ないし無視することでおこされた人災(片平列彦東洋大学教授)と説明できます。過去の薬害をみると外国と日本の危険情報に対する態度の違いが明らかです。

キノホルムによる神経障害。 国は、科学的調査によるキノホルムとスモンの因果関係を軽視し、根拠の無い奇病説やウイルス説をまかり通らせ、早急な被害の原因究明と対策を講じなかつたことで、被害の拡大をもたらしました。この構造は公害水保病にとても似ていると感じます。



くすりの話あれこれ 26

薬害ってなんだっけ 間 規子 (たくみ外苑薬局・薬剤師)

しかし、1981~1983年のFDA (米食品医薬品局) や CDC (米防疫センター) でエイズの危険性が報告され、米国では直ちに安全な加熱処理製剤への変更などの対策がとられました。日本ではその危険性を軽視し、不安な患者を根拠のない言葉で言いくるめ、更には同時期に本剤の自己注射の承認までしてその使用量をのばしていきました。薬害の被害者は、因



わが国では、介護を担う世代が長時間の労働におわれ、狭い住居のなかで、「高齢者」の要望は端に追いやられています。貧困な医療は、「高齢者」が家族や友人と別れて、施設入所せざるを得ない事態をうみだしています。それによって、高齢者は健康に生き、「死」を迎え入れる力を削ぎとられ、次世代に大切なことを学ばせる機会を奪われています。このことは、地域の「生活力」において大きな損失をつくっているのです。 精神科医師・岩田 俊